

---

# せめて、君に甘い夢を/銀魂/土ミツ

槻夜 七瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せめて、君に甘い夢を / 銀魂 / 土ミツ

### 【Nコード】

N1764F

### 【作者名】

槻夜 七瀬

### 【あらすじ】

過去を思い起こす土方十四郎は、突然の来客に平然と対応する。けれどその客がかつての想い人・沖田ミツバであることを知り、逃げるように不審船の見張りへ出向く……

## 001 (前書き)

ミツバ篇を元に書いております。ネタバレなどありますので、OK  
な方のみ読んで下さい

PV数10000人突破ありがとうございます！

全て皆様のおかげです！

これからも宜しく願います^^

「あ  
あ？」

「ね  
え」

0  
0  
1

「……居てくれるのね」

「あ？ どうしたよ、いきなり」

「ううん。なんでもない……何でもないから、もう少し、そっぴいてくれない？」

「おお」

満月の夜。

白くて円い、銀色の光を零すそれは、近くもなく遠くもない位置に座る二人を照らしていた。

彼らの間を吹き抜けていく涼しい風が妙に淋しく感じられた。

高い位置で長い髪を結んでいる目つきの悪い男　土方十四郎は黙ったまま、隣に座る少女を見た。

彼のそれと同じくらい高い位置で髪を結っている可愛らしい少女は、彼の視線に気付いたのか、目を合わせた。にこりと柔らかく微笑して、頬を染める。

それだけで心地良く、ずっとこのままでもいい、と思わせる。

ああ、と吐息をついた。

きっと自分は、彼女に好意を寄せている　。

秋を感じさせる涼しい空気を吸い込んで、ふと自らの手を見た。

痛々しいほどに血豆だらけだ。

おそらくは、剣の稽古の際に出来たものだろう。

そう。自分は武士になろうとしている。

だから。

駄目だ、許されない。

誰かに許しを乞うわけではないが、多分、自分自身が許さない。

俺達は江戸へ行く。

そして武士になるのだ。

これはもう決めたことで、それを曲げる事なんて容易いが、もし曲げたとすれば、彼女が許さない。

…そういう女ヤツなのだ、沖田ミツバという女は。

だが土方はそこが好きなのであって、それが欠けている彼女なんて想像できない。

大分寒くなってきた、身体の弱いミツバを心配してか、土方は立ち上がった。

「ねえ、十四郎さん」

不意にミツバが呼んだ。

「…何だ」

何でもこうも冷たく返事をするのだろうか。  
……自己嫌悪だ。

「江戸で一旗揚げるって、本当？」

「……！」

驚いて目を見開く。

「……………誰から聞いた」

「そーちゃんが。今朝嬉しそうに」

「…あの馬鹿」

「……………ねえ」

沈黙は妙に長く感じられた。

「…私も、連れて行って」

驚いていた。

ただただ、彼は驚いていた。

木の陰でそれを聞いていた彼も、その言葉を向けられた彼も。



「私は…そーちゃんの親代わりだもの。それに、私…私」  
頬を赤らめて、冷たい空気を吸う音が聞こえた。

「十四郎さんの傍にいたい」

「……………」

土方の喉からは言葉が出なかった。

「…知ったこつちやねんだよ、お前のことなんぞ」

後悔なんてしていない。

ミツバを悲しませないためには、これが一番だと。

今だって、そう思ってる。

いつ死ぬか解らないような男と、一緒にいられるわけがねえんだ。

一緒にいる時間が長ければ長いほど、別れは辛くなるものだから。

言い訳がましいのは解っている。

それでも、お前が許してくれるなら、俺は何度でも叫ぶ。

「……………好きだ」

どうしても声は出なかった。ただ、背中を向けて、口だけその形に動かす。

あれから何年経つのだろう。

総悟はこんなにでかくなって、俺の命を堂々と狙ってくるようになってしまった。

あの頃の純粹さはどこへ行ったんだ。

俺の育て方が悪かったのだろうか。

煙草を吸いながら、土方はぼーっと外を見ていた。

「トシ、客だ。総悟を起こしてくれ」

「総悟に客？ 万事屋んこのチャイナ娘か？」

「もしそうなら約束してるんだろ。あの娘との約束なら、総悟が忘れるわけねえよ」

ニカツと笑ってみせる近藤。

それもそうか、と納得して、本題へ戻る。

「…で、その客ってのは？」

「ああ。お前も挨拶しなきゃなあ。来い、トシ」

俺も挨拶しなきゃならない相手？

疑問符を浮かべながら、土方は近藤に連れられて客間へ向かった。

「…いやあ、待たせてしまったなあ。総悟はまだ寝てるから、起こしに行ってもらおうよ。とりあえず茶でも飲むかい？」

「あら、そんなに気を遣ってもらわなくても良いのよ」

にこやかに近藤が声を掛けた。

返ってきた声は紛れもなく女性の声。

俯きがちに襦を開けると、そこには  
。

「……………！」

「ん？ おおい、どうした、トシ？」

彼女の正面に座り、土方が付いてこないのを見ると、近藤は大きめの声で呼ぶ。

「……………トシ？」

客人…沖田ミツバは、聞き覚えのある名前に反応した。

呼ばれて仕方なく、土方は客間へ入った。

「十四郎さん……………？」

「……………」

「どうした、トシ？」

一瞬、彼の頭の中であの日のことが渦を巻いた。

「あ、いや、何でもねえよ。……………久しぶり」

その冷たい声音に、肩を小さく震わせた。

「…久しぶり、ね……」

それだけ聞くと、土方は近藤に言った。

「じゃあ、俺は総悟を起こしてくる」

「あ、ああ……」

沖田を起こした後、土方は監察である山崎の現場へ向かった。

場所は港。

不審船を見張っているのだ。

「…副長？ 何で副長がこんなところにいるんです…？」

訝しげに見られるのも無理はない。

基本的に、この手の現場は監察の仕事なのだ。

戦闘専門の土方達がこのような現場に来ることはそうあることではない。

「…ああ？ なんか文句でもあんのか？」

「いや、ないですけど。屯所の方にお客人が来ているんでしょう？ 毎月激辛煎餅送ってくる沖田隊長の姉上。確か副長達とは武州の

頃からの知り合いだと聞いていたんですが…」

「ああ」

煙草を啜えながら、くぐもった返事を返す。

「良いんですか？ 仲良かったんでしょ？」

…返事はなかった。

「俺、これから見回りの当番なんですけど、お任せして良いでしようか」

気まずい空気から逃げようとするように、山崎は訊く。

先程、その隊長から命を奪われそうになったというのに、気丈なことだ。

「…ああ。早く行け」

波を掻き分けて進む船を見つめながら、煙草をふかす。

改めて自分が嫌になった。

こんな想いをするくらいなら、いっそ忘れてしまえば良かったのに。

思い起こす必要なんて、過去にはないはずなのに。

「…青い過去なんて、俺にはいらねえのによオ」

夜。

「良いんですかい？ 今日くらい屯所に泊まっていけば良いのに…」

「こちらで色々やることがあるの。それに、江戸に住むようになれば、いつだって会えるじゃない？」

「…そうですね。…じゃあ、ゆつくり休んで下せエ」

「ええ、ありがとう。…あ、そーちゃん。あの…あの人は

……」

江戸を案内した帰り、沖田は姉を、嫁入り先の家まで送っていったのだ。

それまでにこやかだった沖田は、『あの人』が誰を指しているか悟り、眉間に皺を寄せた。

「……野郎には会わせねえぜ」

「！」

「今朝も何も言わずに、仕事に行きやがった。…薄情な野郎でイ」



そのまま、姉と付き添いの銀時を置いて、屯所へ歩いて行ってしまった。

「…たくよオ。勝手に呼び出しておいで、置いて行っちゃった」

「ごめんなさい、我が俣な子で…」

「友達くらい選ばなきゃいけねえよ。俺みたいなのを友達にしちゃいけねえ」

銀の天然パーマを掻き上げながら、銀時は言った。

その言葉に、ミツバはくすくすと笑う。

「…どことなくあの人に似てる。どつりであるのが懐くはずだわ」

「はあ？」

そのとき、立ち話をしていた二人に、車のライトが当たる。降りてきた警察の顔を見て、ミツバは倒れた。

「ど、どつりるつね…」

「

「おっ…おっ…」

「…大分落ち着いたみたいですよ。…どうやら容態は、俺達が思  
つてるよりも良くねえみたいで…」

静かになった隣の部屋を見つめながら、山崎は言った。

もう、何年も前のことだ。

そんな青い過去が土方の頭の中を繰り返して回っている。

その日の朝、総悟は稽古に来なかった。

不審に思った近藤は、土方に総悟を呼んでくるように言い付ける。

んだよ、面倒臭エなア。

あんな生意気なガキ、いてもいなくても困らねえ　　つーか、俺にとってはその方が楽だ。

既にこの頃から、土方は総悟に嫌がらせを受けていた。

総悟の家の庭へ入った。

割と大きな屋敷であるが、住んでいるのは総悟と、もう一人。

「……………ちーす。沖田先パイ、稽古の時間っす」

彼に背を向けていたのは栗色の髪をした少年と、同じ髪色の少女。土方の声に驚いたのか、少女は此方を振り向き少年はむくりと起き上がった。

「…てめっ何、人んちに勝手に入っただよ！」

…総悟はまだほんの小さい子供だった。

こんなに正直に、土方に嫌悪感を示してくる。

それは子供ならではのモノであり、土方も理解しているので、しょうがないと思っていた。

「……………ふ」

「？」

総悟を連れて行こうと歩き始めると、背後から、柔らかく笑う声が聞こえた。

視線だけ、その声を追う。

彼女が笑っていた。

高く結った栗色の髪が、心地よい風に揺れていた。  
色白で、瞳はほんのり紅く、美しい。

行っただけじゃない、とでも言うように、彼女はただ微笑んでいた。

それが出会いだった。

その後、彼女は稽古にも顔を出すようになり、総悟は勿論、近藤や土方の世話もしていた。

彼女の笑った顔を見る度に、土方の疲労は溶かされていく。

「…ありがとう」

「……………あ？」

突然の言葉に、土方は思わず聞き返した。

夕日が赤く染まり、それに伴って空までもが赤とんぼのような色に変わっていく。

二人が佇むのは沖田の屋敷の縁側。

夏よりも涼しさを帯びた風が、土方の髪を優しく撫でていた。

「…何だよ、いきなり」

「そーちゃんと遊んでくれて。嬉しいんですよ、私」

変わらない微笑みを浮かべてこちらを見ている彼女を見ると、遊んでなんかいねえよ、という事実は喉の奥に消えていく。

「そうか」

「ええ。あのこ一人だったんですよ。意地っ張りで頑固で、友達なんてできなくて。本当に、安心してんの」

「……………そうか」

そっと、彼女が指を伸ばした。

小さな赤とんぼが、その指にとまる。

「これからも仲良くしてね」

赤とんぼが飛び立った。

彼女は更に優しい笑顔で、土方を振り向いた。

照れ隠しで、土方はそれまでそこにあつた視線を瞬時に移動させる。

頬が熱くなるのを感じた。

何で一度も言えなかったんだろう。

どうして、こうなるまでに、一度だって。

俺は隠していて。

それが護ることになるんだと、思っていた。

だけど、それが本当に正しかったのか、今の俺には解らない。

冬のことだ。

こほこほと、背後で咳き込む声がした。

振り返ると冬らしく厚着をした、沖田の姉　ミツバが寒そうに肩を震わせている。

知り合いだっただというのもあるが、何より彼女が気にかかっていた土方は、ゆったりと歩み寄った。

寒さで頬が赤く染まり、目は自らの爪先を見つめていた。

土方が上着を肩に掛けるまで、その居場所に気付いていなかったかのように顔を上げる。

「と、十四郎さん…?」

呼ばれた彼は呆れた表情を浮かべながら、短い吐息を吐く。



「こんなところで何してんだ？ さつきから咳き込んでるし、風邪引いてるんじゃないのか？」

ミツバは小さく首を振り、それを否定する。

「風邪は引いてないんです…それに、こんなところって言っても、十四郎さんはいるじゃないですか」

心なしか、いつもよりも覇気のない笑顔に見えた。

雪を伴った冷たい風に、彼女の髪が心許なく揺れる。

「……俺はこの先の鍛冶屋の親父に用があつてな。お前は何でいるんだよ」

「私も。この刀を、そーちゃんに渡す前に直してもらおうと思って」

彼女が持っていたのは、立派な刀だった。

その鞘を愛おしそうに撫でながら、また力ない笑顔を見せる。

「ちゃ、んと、鍛冶屋まで行けるか…ふあ、んで ゲホッ！」

「!？」

「ケホッ…コホ、ゴホゴホッ…! ツ」

ミツバは倒れ込んだ。

辛うじて受け止めた土方は、何度も彼女の名前を呼んで、意識がないことを悟ると、家まで連れて行った。

家に着いて、彼女を寝かせてから何分経ったのだろう。  
ようやく、ミツバは目を覚ました。

「大丈夫か？」

「ええ……ごめんなさい。迷惑掛けて」

「いや、俺は良いけど……。そういえばさっきの刀」

「…死んだ父が言ってたの。いつかその時が来たら、これをそーちやんに渡せって」

「その時？」

ミツバは総悟のことを思いながら頷いた。

「『誰かを護りたい』って言った時よ」

「護る…？ あいつが言ったのか？」  
嬉しそうにミツバは頷く。

「ええ。昨日、稽古から帰ったら」

「……………そうか」

「剣は誰かを護るときに振るうものなんでしょう？ そーちゃんに、その気持ちが備われればきつと強くなれる。大切な人を傷つけるなんてない」

「…じゃあお前は」

「え？」

「お前は、傷つかないんだな」

嬉しそうだった。少しだけいつもの暖かさが戻った気がする。

「…そうかしら？ そうね、そーちゃんの『大切な人』に私かなれていけば、きつと」

「総悟だけじゃねえよ」

土方の低く、強い声がそう言った。  
ミツバは驚いていた。

「近藤さんだって、お前のこと、大切だって言ってる。いなくちゃいけねえヤツだって」

「ふふ…近藤さんにまでそう言ってもらえて嬉しいわ」

「俺も、だから」

「……え？」

「俺も、お前にはいてほしいと思ってる。……総悟が俺に嫌がらせしないか見張ってもらわなきゃならねえからな」

すっかり暖かみの戻った、いつものような微笑みを向けた。

「……そうね」

「いざとなったら、俺達が護ってやる。……お前の親父はそれが聞きたかったんだろう」

「……そうかもしれないわ」

「刀、俺に預けてくれねえか？ 俺が鍛冶屋まで持って行くから。  
……総悟は強くなる。それに俺が少しでも関われるなら、関わりたい  
と思うから」

「……ありがとう」

ぶっきらぼうな言葉の一つ一つが、今の私にとっては痛かった。

もう離れてしまったんだと思いきらされていく。

待っていたって、もう駄目なんだと。

私は貴方に意地悪をします。

ねえ、貴方ならどちらを選ぶ？

どちらが、私の幸せだと思いつ？

The desire crosses each other .

Prelude of sorrow .

you get wounded , it understand  
s .

However , I want to love .

…鍛冶屋から連絡があつたのはそれから間もなくなつた。

土方はミツバの体の調子を気遣い、すぐに引き取りには行かなかつた。

あのも、彼女は咳き込んでいたから。

元々ミツバは色白ではあつたが、それが更に青白くなり、食欲もないのか少し痩せたようにも見えた。

「……大丈夫か？」

隣を歩く彼女に、そつと声を掛ける。

「ええ、もう大丈夫。十四郎さんが刀を取りに行くのも待ってもら

ってしまったし、その間休んだから」

そう言つて笑顔を浮かべる彼女の顔は、やはり青白くて。

土方の胸には不安が滲んだ。

そうでなくても、ミツバは話すごとに咳をするのだ。

…まるで治ることのない風邪を生まれたときから持っていたかのよう  
うに。

暫く歩くと、ミツバは小さく呟いた。

「……………寒い」

聞こえるような大きさではなかったのだ。

けれど、彼女のみには神経を集中させていた土方は、それさえ聞き逃さない。

「寒いか？」

「…え？」

「今、お前が言つたら？ 上着、貸すか」

思いがけないような優しい言葉。

まさか、それが彼から聞けるだなんて、誰も思っていなかっただろう。

戸惑つて遠慮しながらミツバは言う。

「で、でもそれじゃあ十四郎さんが風邪引いて」

精一杯遠慮するので、土方は困り、前髪を掻き上げる。

「じゃあどーするんだよ？ またお前の風邪が酷くなったら、俺ア総悟に殺されるぞ」

弟の名前が出たことに嬉しさを感じながら、くすつと微笑んだ。

「…じゃあ、上着、貸してください」

「お、おう」

自分で言い出したことなのに、今更照れる土方。  
脱いだ上着を、ミツバの肩に掛けた。

「あつたかい……」

ミツバは頬を赤く染めて、嬉しそうに笑う。

土方には、その赤さが、寒さによるものなのか、それとも違うものなのかは判別がつかなかった。

「どーした？ 土方、何で上着着てねえんだ？」

嫌味っぽく笑いながら鍛冶屋の主人は言う。

「るせえな。何だって良いだろ」

「まあそーだよなア。てめーみてえな馬鹿が風邪なんて引くわけねえしなア」

「…いちいち腹立つなコラ」

二人にお茶を出し、自らも一息ついたところで、主人は預けていた刀を持ってきた。

「ほれ、これが土方オメーのだ」

受け取って鞘から出すと、刃は青く光って見えた。

「…やっぱすげえな」



満足そうに微笑むと、ミツバに、父からの刀を手渡す。

「……アンタにはこれだ。相当使い込んであるな。手入れもしてあった。親父さんの、アンタ方への愛が詰まっていた」

その刀の刃は仄かに紅く見え、鋭く、冷たく輝いていた。ミツバは、それを鞘に戻し、頭を下げると、刀を抱きしめた。

「ありがとうございます……………」

「…大丈夫か、ふらふらしてんぞ」

帰り道でも、土方の、らしくない気遣いの言葉が聞かれた。

「大丈夫。荷物だって持ってもらってるし」  
「そうか」

だが、彼女の顔色は、朝よりも確実に悪くなっていた。

「…思えば、あの後だよな。あいつが肺を患ってるって聞いたの」  
あの頃とは違う、堅い隊服に身を包んだ土方は、不審船の見張りを  
行いながら、そう呟いた。

先程、久しぶりに沖田の冷酷な目を見た。  
あのまま居たら、確実に殺されていただろう。

「嫌われたもんだな」

くしゃっと前髪を掻き上げる。

あの青い過去と今とでは何が違うのだろう。

状況は変わっていないはずだった。

最も変わったのは。

「もう会うことはない」

想いが交錯する

哀しみの序曲

貴方が傷つくのは解っています

それでも愛したいのです

ねえ、好きでいても良いの？

想いは口に出すことは叶わなかった。

それをもし言えば、彼を傷つけることは明らかで。

きっと彼は、自己嫌悪しすぎてしまっから。

自惚れでも何でもなくて、ただ確信していた。

土方は無心で竹刀を振っていた。

「……………」

「土方さん」

道場の入り口には、道着を着た沖田の姿がある。

「一手、ご教授してもらっても良いですかね？」

言った途端、沖田は土方に歩み寄り、竹刀を構えた。

…少しの間も見えない構え。

改めて沖田が真選組随一の剣の使い手であることを理解した。

「……………行きますよ」

返事を待たずに竹刀を振る。

ミツバは、病室で男と話していた。  
彼は蔵場当馬。貿易商を務めていて、ミツバの婚約者でもある。

「……………ごめんなさい、また私の病気のせいで、式が延びてしまったわね」

彼女が言っていると、蔵場は優しく笑った。

「なに、気にすることはない。式なんて形式だから。僕は式なんて挙げなくても、とっくに君と夫婦のつもりだよ」

蔵場の言葉に思わずミツバは微笑ほほった。

「ありがとうございます、当馬さん」

その後、仕事があるから、と蔵場は言っていると、彼女を寝かせ、布団を掛けた。

「あんまり辛い物、食べ過ぎたら駄目だよ?」

「ふふ、解ってます。私だってそこまで馬鹿じゃありません」

笑顔を交わすと、蔵場は病室を出た。

ミツバが視線を彷徨わせていると。

廊下から、物音が聞こえた。

「？」

ひょこつと出てきたのは銀時だった。

手には沢山の辛い菓子類。

くすくすと笑いながら、

「すごい、本当にお願ひしたら何でもしてくれるんですね」

「万事屋だからな。…ほら、食い過ぎるなよ？ おい、オメーも食うか？」

「あ、結構です。こついつときは真選組ソーセージを携帯することになってるんで」

「あれ、山崎さん？」

ベッドの下を覗き込むミツバと銀時。

二人と視線が絡んだ。

「しまったアアアア！」

「最近、姉上の周りを嗅ぎ回らせてるようで」

沖田の言葉に、土方は答えない。

「一体、どういつつもりなんですかね」

「…最近の攘夷派の武器は明らかに便利な物になっている。刀なんかよりもずつとな。その武器密輸に関わっていると見られているのが 蔵場当馬」

「！」

「お前の姉貴の旦那は、真選組おれたちの敵なんだよ」

打ち合いながら、会話を続ける。

「そんなの、俺達が叩き斬ればいい話でしょう。清濁併せ呑むくらの器量がなきゃ、商売なんてやっていけませんよ」

土方の脳裏に浮かぶ記憶。

あのミツバの表情を、声を、忘れた事なんて無い。

…忘れる事なんて出来なかった。

「これ以上姉上の幸せ奪うのは、止めてもらいてえんですが」

「それは俺に奴を見逃せって言うてんのか!？」

一歩引き、片手で竹刀を向ける。

「あれ、そう聞こえませんでした？」

いつもと変わらない表情を沖田は見せた。

「…今のは聞かなかったことにする。稽古は終いだ」

竹刀を握る手に力を込めた。

唇を噛み締める。

「まだ話は終わってませんか」

背後からの突きを辛うじて避ける。

「てめえ舐めてんのか!？ そんなこと出来るわけ」

声を遮るように、沖田の竹刀が床に落ちた。

「!」

見ると、沖田が俯いていた。

「……………もう、長くねえんです」



「……………」

「もう、長くねえんです」

土方は言葉を見失う。

「やってらんねえよ…小さい頃から俺の世話ばかりですよ。自分のことは後回しで…やっと幸せ手に掴みかけたと思ったら……………」

そとと、沖田は前髪を掻き上げた。

まるで自分の目に浮かぶ涙を隠すように。

「せめてよオ、死ぬ前に一時でも人並みの幸せ味わわせてやりてえんですよ」

静かに土方は煙草を啜え、火を付けた。

「…取引は明日の晩だ。刀の手入れしとけ」

また自己嫌悪をする。

「ッ……………」

あの時と同じ様な感覚だった。

立ち去る背中に吹く風が、ひたすら冷たく感じた。

「土方アアアアアッ!!」

覚えていない。

覚えていないのだ。本当に。

嫌悪感が頻りに彼を責めた。

「知ったこつちやねんだよ。お前のことなんぞ」

片足を引きずりながら、彼を振り返ることなく、そう言った。

「… 気に食わねエ」

小さく低い、沖田の声だった。

雨が降り出した。

銀時は、それを空虚な目で見つめている。

「……銀さん、山崎さんと何を話していたんですか？」

通ううちに親しくなっていたミツバと銀時。

相変わらず山崎はベッドの裏に貼り付いていて、先程銀時と外へ出て行ったのだ。

「野暮なこと訊くねエ。男だけで話す話題って言ったら、これしかねえだろ？」

懐からビデオを少し覗かせる。

「ふふ、やだ」

柔らかく笑いながら、ミツバは言った。

「男の子って幾つになってもそうなのね。集まっては連んで悪巧み



思い返すのは、山崎との会話。

「実は、ミツバさんの旦那……蔵場当馬は、武器密輸を動かしてる  
と言われているんです」

「…あの女は知ってんのか」

「……………さあ、解りません。このことは副長に口止めされてる  
んです。だから…」

「けほけほっ」

「！」

我に返った銀時は、咳き込むミツバを見た。

「お、おい…大丈夫か？ もう寝た方が…体に障るぞ」

「大丈夫…です。もう少し、誰かと…お話ししたいの」

返事をする彼女の顔色は真っ青で、誰にだって解るほど血の気が失  
せていた。

「けほ、けほけほっ！

ゴホッ！」

「!!! オイツ!」

口を押さえたミツバの白い手は、自らの血で赤く染まっていた。

「姉上ッ……」

「!!!」

沖田と近藤が駆けてきたのはそれから間もなくだった。

弟が目にした姉は、集中治療室で様々な機械に囲まれて横たわっている。

「急に容態が悪化したって。かなりマズいみたいで。家族は相応の覚悟をしておくと、医者が……。副長、行ってあげて下さい」

山崎は静かに訊く。

聞こえなかったのか、土方は返事をしない。

「こんな時に仕事なんざ……。それも……。よりによってミツバさんの婚約者をしよっ引こうだなんて。副長が間違ったことをしてるなんて思っちゃいけませんよ。……。けど」

雨はひたすら降り続く。

「今やるべき事は…こんな事じゃないでしょ。土方さん…アンタのいるべき場所はここじゃないでしょ？」

「…フン。俺が薄情だとしても言うつもりか？ そつでもねえだろう」

啜っていた煙草を、指に挟む。

「テメーの嫁さんが死にかけてるってのに、こんな所で商売に勤む旦那もいるってんだからよォ」

「…！ ひ、土方さ」

「山崎、てめえこの事他言しちゃいめーな？」

「は、はい」

「知ってんのは隊ん中じゃ俺とお前だけだな」

「はい」

「んじゃ、この事は引き続き極秘扱いで頼むぜ」

静かに土方は言うつと、火の付いた煙草を濡れたアスファルトに捨て、足で揉み消した。

「副長、アンタまさか……………副長オオオ！」

雨が降っていた。

冷たく、強かに、誰かの涙のように。

重い色をした空を見上げることはなく、そして同じ色をした海も、高さを増した波を寄せるだけで。

「サヨナラ」と告げることさえまもなく

「愛してる」と伝えることさえ叶わない。

擦れ違うことしか出来なかった、白い想いを

今、貴方へ届けることは出来ますか



沖田は横たわる姉を見つめていた。

不意に足音が聞こえて振り返る。

そこには近藤が立っていた。

「お前、ここに来てから、ずっと寝てねえだろ？ 俺と交代！ 寝てきたから、俺」

いつも通りの表情で、沖田が目の下を指さす。

「…クマ」

確かに近藤の目の下には、ハッキリとしたクマが出来ていた。

「メイクだ、これは」

眠れるはずがない。

あんなに親しかったのだ。簡単に忘れられるわけもない。

近藤は振り向くと、椅子に横たわる男を見下ろす。

「…つか、こいつは何でいるの」

銀時は椅子で横になったまま、鼾をかいていた。

「トシと派手にやり合ったらしいじゃねえか」

呼吸器を付けたミツバを見つめながら、近藤は静かに言った。

「……今は、野郎の話は止めて下せエ」

沖田の目は虚ろだった。

様々な大きさのガーゼや絆創膏を貼った痛々しい彼に、やんちゃな子供の影など有りはしない。

「詳しくは教えてくれんかったがな、言っていたぞ。今のお前には負ける気がせんと」

「止めるって言ってるんでイ！」

近藤は震える彼から視線を動かす。

「…何だっつてんだ、どいつもこいつも。一言目にはトシ、トシって顔を上げた沖田の表情は殺気立っていた。

「肝心の野郎はどうしたイ。姉上がこんななんだつてのに、姿も見せねエ。昔振った女が死のうが、知ったこつちやねえってかイ。流石にもてる男は違つときた」

「…お前、疲れてるみてえだな。……寝ろ」

「……軽蔑しましたか」

「…寝る」

「邪魔ですかイ、俺は。土方さんと違って」

近藤は沖田の胸ぐらを掴む。

「局長オオオオ！ 大変なんです、副長がアアアアア！」

山崎が大きく手を振りながら駆け寄ってきた。

あんなに時間は経つたのに、まだ雨は止まない。

頬に貼ってある大きな絆創膏に触れる。

土方はどんよりとした空を見上げ、そつと刀を構えた。

カチャ

音が、蔵場の首の辺りで聞こえる。

「転海屋、蔵場当馬だな。しつ用改めである。神妙にしてもらおうか」

蔵場が視線だけを此方に寄越した。

「…貴方はいつぞやの」

「武器密輸及び不逞浪士との違法取引の疑いでお前を逮捕する。神妙にお縄につけ」

「フフ。友人の婚約者を躊躇いもなく捕まえますか。なかなか太い神経をお持ちのようで」

土方は不敵に笑ってみせる。

「犯罪に手エ染めながら真選組の縁者に手エ出すたア、てめーも太エ野郎じゃねえか」

「トシが一人で!？」

近藤は声を上げた。

「山崎イ！ てめえ何で今まで黙ってた！」

「すいません！ 副長に堅く口止めされていたんです！」

襟元を掴まれ、前後に振られながら、山崎はしっかりと伝えた。

「親類縁者に攘夷浪士と関係のある者がいることが隊内に知れば、  
沖田隊長は真選組での立場を失うと……………」

な

「トシの野郎！ 最初からてめー一人でカタつけるつもりだったな  
……………」

何で……………

沖田の頭を過ぎるのはあの時の土方の言葉だった。

「知ったこつちやねえんだよ。お前のことなんざ」

「あの野郎オ！」

走り出そうとする沖田を制したのは近藤だった。

「お前は動くな」

「！」

「…傍にいてやれ。それに…………今のお前では足手まといだ。剣に迷  
いのある奴は死ぬ」

立ちただかる大男の声は静かで、そして強かった。

沖田は、自分の動きを止めようと伸ばされた腕を掴む。

「…………俺達を信じろってかい。冗談じゃねえ、俺は奴に貸しつく

るのだきやあ御免こうむるぜ」

掴まれた腕から伝わる、力の強さ。

ぎしっと、軋んだ音を立てるほどに、沖田の握力は凄まじかった。

「近藤さん、アンタは俺を誤解してる。俺はアンタが思うほど綺麗じゃねエ。人を信じるとか、そういう奴じゃねえんだ。てめーのことしか考えちゃいねエ」

そう言う彼の声は、何処か淋しさを含んでいて。

「いつもアンタ達と一緒にいても溝を感じてた。俺はアンタらとは違うって。…だから姉上もアンタも、アイツの所へ」

瞬時に、近藤は沖田を殴った。

吹っ飛んだ沖田は、銀時の眠る椅子に背中をぶつける。

驚く山崎が、声を上げた。

「局長オオオ！」

「イテテ……随分と俺には手厳しいな、近藤さんは」

「そりやお前がガキだからだ。トシがお前と同じことを言ったら、俺ア奴も殴ったよ。俺達はそういう仲だろっ」

赤くなった手でスカーフを緩める。

近藤の声は強かった。

「誰かがねじ曲がれば、他の二人がぶん殴って真っ直ぐに戻す。昔からそうだった。だから俺達は永遠に曲がらねえ。ずっと真っ直ぐ生きていける」

一つ一つの言葉に暖かみを感じた。

「てめーが勝手に掘った小せえ溝なんて、俺達は知らねえよ。そんなもん」

驚きで目を丸くしている沖田を見下ろし、意志の強い目で、拳を固めた。

「何度でも飛び越えてって、何度でもてめーをぶん殴りに行ってやる」

近藤の拳は大きく、そして、赤かった。

「そんな連中、長エ人生でもそうそう会えるもんじゃねえんだよ。俺達は幸せもんだぜ。そんな悪友を、人生で二人も得たんだ」

彼は背を向けた。

「総悟」

拳と同じように、その背中も大きく。

「もし俺が曲がっちゃまった時は、今度はお前が俺を殴ってくれよな」





土方の背後には、沢山の不逞浪士がいた。蔵場を護るための者であったり、他の貿易商の護衛であったり。

当然、蔵場を逮捕しようという土方は敵である。

浪士の溢れる倉庫街。

そこで単独で暴れる土方は、応援を待つ素振りなど微塵も見せない。一人であるにも関わらず、何人もの不逞浪士を圧倒しているのだ。

「うわああアアアッ」

「っ……」

「！ あっちだ、追えっ！」

一つのコンテナの影に走り込む。

敵が追いかけてくるのを確認すると、ジャスタウェイを投げ込んだ。

同じ光景を頭に浮かべながら、沖田は呟く。

「惚れてたんですよ、本気で。冷たくつっぱねられながら、それでもずっと野郎の帰りを待ってた。ずっと」

銀時の眠る椅子に背を凭せ掛けながら。

「ようやくフツ切って幸せ掴みかけたと思ったら、またあいつだ。何度姉上の邪魔をしゃがる。酷エ奴だ」

ひたすら躰をかき続ける銀時に、聞かせる気はなく、天井を仰ぎ見る。

「酷エ奴だよ、ホント。………わかってまさア、俺の姉上が、酷エ奴に惚れるわきゃねーってことくらい」

土方は自分の傷が、また二つ増えていくような気がしていた。

「本当は、わかってた。いつ死ぬとも知れねー身で野郎が姉上を受け入れるわきゃねーってことくらい」

天井から視線を床に落とす。

「わかってた。野郎が姉上の幸せを思っただけで拒絶してたことくらい」

刀を握る手に、一層の力を込めて、走り出す。

「わかってた。野郎も姉上の幸せを願ってることくらい。………」

「………わかってたんですよ、俺ア。でも癪じゃないですか」

一呼吸ついた。

「野郎は、気に食わねエ」

胸の中にはあのもやもやしたモノでなく、不思議と暖かい気持ちで満たされていた。

「気に食わねエ野郎でいいんでイ」

沖田は、上着を手にとって立ち上がった。

「旦那、長エ話聞いてくれてありがとうございやした。こいつは姉上には内緒で……って聞いてるわきゃねーか」

上着を肩へ持つて行く。

「野郎には大事なもん色々持つてかれたが、行かなきゃならねエ。

近藤さんには死ぬと言われたんでねイ、最後かも知れねエ：地蔵にでも全部喋つときたかったのさ」

「その大事なものに、あいつも入っちまってんだろ」

「！」

その声を聞き、振り返る。

「旦那」

銀時が起き上がった、肩を回していた。

「……よく寝たぜ。さアて、眠気覚ましに一丁いくか。てめーの姉ちゃんにも、友達だつて嘘ぶっこいちゃったし。……最後まで付き合うぜ、総一郎くん」

沖田が、いつも通りの表情で目の下を指さした。

「……………旦那、クマ」

姉上、俺ア幸せもんだ

長エ人生でもそうそう会えるもんじゃねエ

そんな悪友を、人生で三人も得たんだ

砂煙が舞い上がる。

血の臭いが鼻を掠め、一般人なら眩暈がするのだろう。

けれど、彼は走っていた。

返り血を浴びて。

それでも彼は立ち止まらなかった。

ここで止まってしまったら、本当に、何もかもが、アイツを裏切る  
ことになってしまうから。

最後まで、護らせてくれよ。

「おおおおお！」

単独で刀を振りかざし、数々の浪士達を圧倒する。  
そんな土方の様子を見下ろす、二人の男がいた。

「話が違うではないか、蔵場殿？ 幕府の犬は既に抱き込んだと聞  
いていたが」

一人、また一人と薙ぎ倒していく。

「あれなるは真選組でも鬼の副長と恐れられる土方十四郎。あれに嗅ぎ付けられたのでは、卿も我らもただでは済むまい」

返す蔵場の声は静かだった。

「いえ、加勢が来るには遅すぎます。恐らくあの方、本当に一人で」

「一人で？ 何故」

「さあ。お侍様の考えは私たち商人には理解しかねますゆえ」

刀を振り払われた浪士が一人、懐から銃を取りだし、土方を狙った。

「とすれば」

パン

「あれ一人を片付ければ事は済むこと」

不意に、右足に力が入らなくなり、土方は踞った。

伸ばされた足を見ると、ドクドクと赤い血が流れている。

「…くっ」

身動きの取れなくなつた彼を見た浪士達は、彼を取り囲んで一斉に駆け寄つた。

「あの方には消えてもらいましょうか」

「先生、脈、血圧共に弱まってきました！ 大変危険な状況です！」

「手は尽くした…あとは……………」 家族の方は「

「そ、それが ……」

江戸の道を、パトカーが凄まじい速度で走っていた。

「退け退けエエエエ！ 真選組のお通りだアアアアア！」

近藤はひたすら、土方の身を案じている。

トシ、あのバカヤローめが。総悟を隊から追い出そうなんて奴、俺達の中にいるかよ。

仲間だろうが、バカヤロウ。

何でも一人で背負い込みやがって。憎まれ役まで一人で請け負うつもりか。

…俺ア知ってんだぞ、トシ。

お前がミツバ殿を

駆け寄ってきた浪士達を辛うじて避けた土方は、右足を引きずりながら、死角を探していた。

が。

見渡す限り、敵だった。

彼は黙ってその中心に移動する。

「残念です。ミツバも悲しむでしょう。古い友人を亡くすことになるのは」

雨は降り止まなかった。

「貴方たちとは仲良くやっていきたかったですよ。真選組の後ろ盾を得られれば、自由に商いが出来るというもの」

蔵場の声は以前と変わっていない。

「そのために縁者に近づき、縁談まで設けたというのに、まさかあのような病持ちとは」

感情のまるで入っていない声。…本当に、冷たく。

「姉を握れば総悟くんは御しやすいと踏んでおりましたが、医者の話ではもう長くないとのこと。非常に残念な話だ」

「最初から俺達抱き込むために、アイツを利用するつもりだったのかよ」

「愛していましたよ。商人は利を生むものを愛でるものです。ただし……」



雨が、強くなった気がした。

「道具としてですが。あのような欠陥品に人並みの幸せを与えてやったんです。感謝してほしくらいですよ」

土方は煙草を啜え、火を付けた。

煙草の味を感じながら、彼の頭に、沖田の言葉が蘇る。

「せめてよオ、死ぬ前に一時でも人並みの幸せ味わわせてやりてえんですよ」

ふうつと煙を吐き出し、不敵に微笑んだ。

「クク…外道とは言わねえよ。俺も似たようなモンだ、酷エこと腐るほどやってきた。…拳げ句、死にかけてるときにその旦那叩き斬ろつってんだ。酷エ話だ」

「同じ穴のムジナという奴ですか。貴方とは気が合いそうだ」

「……………そんな大層なモンじゃねエよ。俺ア、ただ」

刀を肩まで持ち上げ、指先でそつと拭いた。

「惚れた女にや幸せになってほしいだけだ」

彼の脳裏には、あの秋の日の光景が蘇る。

「こんな所で刀振り回してる俺にや無理な話だが……どっかで普通の野郎と所帯持って、普通にガキ産んで、普通に生きてってほしいだけだ」

そしてその思い出は、淡く仄かな温もりを残して消えていく。

……土方は蔵場を見据えた。

「ただ、そんだけだ」

「成る程。やはりお侍様の考えることは私たち下郎には、はかりかねまするな」

蔵場は片手を拳げ、振り下ろした。

「撃てエエエエエエ！」

ドオンッ

爆発音がしたのは蔵場の示した方向ではなく……。

「！」

「いけエエエエエエ！」

駆け込んできたのは近藤たちだった。

「しっ……真選組だアアア！」

「トシイイイ！」

蔵場の側にいた一人が、銃で土方を狙う。

「ッ………」

小さく舌打ちをすると右足を引きずりながらも、素早く走った。

しかし。

その通過地点で、爆発が起こった。

「トシイイイイ！」

ふわり　と、土方の上着が宙を舞う。

「…車を出しなさい」

蔵場はそう言くと、用意してあった車に乗り込んだ。

「とんだ誤算…やはり野蛮な猿と手を組もうなどと、無理な話でしたか」

運転手がアクセルを踏み込む。

「病院へ向かいなさい。あの女、死にかけとはいえ人質くらいにはなるでしょう」

そう言って目を閉じた瞬間、蔵場の肩に鋭い痛みが走った。

「！ ぐっ…ぐあああああ！」

「きっ……………貴様アアア！」

「ふ、振り落とせエ！ 何をやっている、早く撃ち殺せっ！」

助手席の男が身を乗り出し、車の上にいる土方を狙つ。

そして引き金を引く、まさにその瞬間。

「！」

見覚えのあるスクーターに乗った男が、ずるりと彼を引きずり下ろした。

「！ てめえ！」

銀時は懐から、激辛煎餅を取りだして、土方に投げた。

「安心しな、煎餅買いに來ただけさ。てめーらで届けてやりな」

言いながら、木刀を車の片輪に突き立てた。

残像が、消えることはなかった。

あのおきあんなにも傷つけたのに、今もお前は前と同じに笑っていて  
思い返す度、俺は青いとあしらってきただけ

それでもやっぱり、消えることなんてなかった。

俺があの日面の影を探さなくて良いのは、お前がそのままで居てくれ  
れたから。

…そうやって安心して俺は、お前から見たら滑稽なんだろうな。

心配を感じて振り向いた土方の視界に入ったのは、同じ隊服を着た、  
青年だった。

俺と同じように顔に絆創膏を貼り、頑固そうな目で刀を持って。

その刀は、お前が渡したモノなんだろう。

車から飛び降り、銀時と同じようにもう一方の車輪に刀を突き立てる。

火花が散っていた。

「がアアアアアアアアアア！」

前輪が浮き上がった車は、真っ直ぐに沖田の元へ走っていく。

私を置いていくんだもの。

浮気なんてしちゃ駄目よ。きつと自分の道を貫いてくださいね。

きつと

きつとよ

鯉口を切った音がしたかと思うと、沖田は刀を振り下ろした。

向かってきていた車を真っ二つに斬って。

二つに分かれた車は、流れるように離れ、沖田の背後で火を上げた。

振り返った沖田の表情は、いつもよりも淋しそうに見えた。

「……姉上、ごめんなさい。俺ア……ろくでもねエ弟だ……。結局、姉上の幸せ奪ってきたのは……俺」

ミツバを囲んでいた機械はなくなり、周りは真っ白な壁だった。

沖田は姉の顔を見れずに、ただ俯いていた。

「ごめんなさい、ごめ」

遮るように、沖田の顔をミツバの手が触れた。

「そーちゃん……いいの。よく頑張ったわね。立派に……立派になった。本当に強くなった……」

「強く………なんかねエ。姉上……僕は……俺ア」

「振り返っちゃ……駄目」

彼女が思い起こす、彼が「青い」と言った過去。

こちらをちらちらと見つめる沖田と、その前を歩く近藤。

そして 土方。

あの前日、近藤と沖田がどれだけ寂しかったも、土方だけは何も言わなかった。

沖田がどれだけ涙を流しても、土方は泣かなかった。

けど、確信できる。

彼は誰にも気付かれることなく泣いていた。

「寂しい」なんて言うわけもない。

「ごめん」なんて泣くわけもない。

けれど彼は泣いたのだ。

「寂しい」でも「ごめん」でもなく。

「愛している」と。

飲み会の後、一人で、縁側に佇んで。

青白くも見えた月を見上げながら、それを隠していた。

「決めたんでしょ、自分である時。自分で選んだ道でしょう」

「そうだ。迷ったことなんて一度もない」

土方は腕と足に包帯を巻かれていた。

「だったら……謝ったり……したら駄目。泣いたりしたら……駄目」



「…そうだよな。走り続けなくちゃならねんだ」

走り続けなければ。自分だけは。

「脇見もしないで前だけ見て…歩いていく、貴方たちの背中を見るのが好きだった」

「お前の淋しそうな笑顔だけは、もう見たくなかった」

せめて約束は 約束くらいは、護りたい。

「ぶっきらぼうでふてぶてしくて不器用で……でも優しい貴方たちが大好きだった」

「無理して笑うお前なんて好きじゃなかった。………だから」

看護婦の手から解放された土方は、激辛煎餅を持って、屋上へと上がっていく。

「……何も出来ねえけど、せめてよオ…約束くらいは護ろうと思っただ」

「…だから…私、とつても………幸せだった。貴方たちのような、素敵な人たちと出会えて」

ミツバの手は、段々と熱を失っていく気がした。

「貴方みたいなの……素敵な……弟をもてて……」

ああ、サヨナラだ、と誰かが言った。

「そーちゃん、貴方は……私の……自慢の……弟よ」

力さえ失ったミツバの手が、するりと落ちる。

沖田はそれをそっと取り、また自らの頬に当てた。

『サヨナラ』と、声にはならなかった。

溢れ出る涙を、誰にも見せることはなく。

屋上では、激辛煎餅の袋が、そっとベンチに置いてあった。

土方はそれを頬張りながら空を見上げる。

約束が、蘇る。

出発前日だった。

飲み会を開いて、そのあと。土方は一人で縁側に佇んでいた。涙を隠すためだった。別れが辛かった。

背後から、控えめな足音が聞こえた。

「…十四郎さん？」

「……おう」

振り向けなかった。

「良いです。こっち向かなくて。…一つだけ、約束してほしいと思  
つて」

「…何だ？」

「十四郎さんらしく、生き抜いてください。そして、私…いつか会  
えたときに、また『十四郎さん』に会えるように」

「……俺らしく？」

「はい。今の貴方みたいに、ずっと、これからも生き続けてほしい  
んです」

「…また、『俺』に会えるように……？」

「はい。……約束、してもらえますか？」

無言で、土方は手を伸ばした。

小指だけを立てて。

「……………指切り。…約束しましたからね」

「…おう。約束…な…」

「…なあ、俺は約束、護れたか…？」

辛<sup>から</sup>さを堪えながら土方は呟く。

「俺はなア…約束なんてしなくたって、いつだって走ってるんだよ。いつお前に会っても良いように」

いつの間にか、雨は止んでいた。

「今度はお前が護る番だ。…いつか俺と、また会ったとき、『お前に会えるように…』」

夜が明ける。

「……………笑うなよ？ 本気なんだ。…お前、幸せだったのか？」

地平線の辺りは、もう赤くなり始めていた。

「……………そーか」

会話なんてしていなかった。ただ、過去の彼女と。

「なあ、もう届かないんだろーけどな」

ふわっとした涼しい風を受けながら。

「愛してる」

もう一度、煎餅を頬張った。

「辛エ。……辛エよ。……チキシヨー、辛すぎて涙出てきやがった」

ごしっと、涙を拭い去る。

「辛エ」

屋上の物陰にいた銀時は、持っていた煎餅を嚙り、明るくなってきた星空を見上げた。

「辛エ」

仄かに色を変えた夜空に、浮かぶ星はまだ煌めいている。

約束しか護れなかったけれど。

こんなにも伝えたかった言葉がここにある。

きつとも届くことはないだろうから

ああ、どうか

せめて、君に甘い夢を。

終

011 (後書き)

次回は後書きです

## 000：後書き

というわけで終わりました。せめて、君に甘い夢を。  
どうだったでしょうか。

ここは後書きなのに読んで下さってる方は天使です。

ミツバ篇は本当に好きです。

最初は沖田さんが沢山出てくるっただけで楽しみだなあと思っていたんですが、いざ見るとですね…

待ちきれずに原作まで読んでしまった私ですが、それでも泣けました。

アニメも原作も良いです。涙で最後の方は見えなかつたりしたんですけど。

大事にしたかったのは物語の佳境、沖田さんの長台詞です。私が泣いたのはそこからでした。

けどテーマが土ミツなので、そこも大切にしつつ、やっぱりミツバさんと土方さんの感情も描けたらと。

やっぱり稚拙な文章でお恥ずかしい…。どこまで表現できたのか不安でいっぱいです。

原作やアニメのイメージを壊したくなかつたので、台詞や動作は殆ど同じになっています。

因みに後半の沖田さんの長台詞と土方さんの台詞、最後のミツバさんの台詞は全部暗記しております^^笑



過去話も入れたかったですけどあまり多すぎても良くないかな？と思  
いまして…

所々省略してある場所もございます。

沖田さんとミツバさんの会話とか…やっぱり入れておくべきだった  
かなと思っただときもありましたが、私はこれで良いと思っています。

やっぱり好きな人が死んでしまうのは辛いですね

婚約者もいて、彼女を好きだった自分に嘘をついてまで護りたかつ  
たのに。

土方さんよりの描写だったので、彼がいないところは少し省略して  
あります。

最後の辺のミツバさんの台詞と土方さんの台詞

「振り返っちゃ」からです。

土方さんとミツバさんの台詞が同時にありますが、会話ではありま  
せん。

別の場所にいるんです。それでも心は通じていればいいなっていう。

私は殆ど沖田さん中心の物語を書くので、土方さんを書くのは新鮮  
でした。

書きにくいと思う反面、感情移入しやすくも感じました。その時々  
によって違うモノなんですネ。

あれ？日本語変かも知れない…

土方さんは絶対に人に泣き顔を見せない人だと思います。

私もそんな人が格好いいと思うけど、やっぱり見せてほしいときも  
ありますよね。

けど、貴方が嫌なら見たくないわ…って言えるのがミツバさんだと  
思います。

土方さんが「好きだ」じゃなくて「愛してる」と言ったのはですね、私の中の、愛の条件でそうさせてもらいました。偉そうなこと言うなって怒らないでくださいね？

私の思う『恋』は自分の気持ちが一方向だと思っっている状態なんです。

勿論、そうでない人もいるんですが^^

『愛』は気持ちを通じていることを解っている状態だと思っんです。きつと、想いを伝える前のミツバさんは、土方さんは、恋をしていました。

想いが伝わってきて、初めて土方さんは愛を知ったんじゃないかな？と感じたので、こうなりました。

長くなつてすみません。最後にもう少し。

沢山の愛を、ありがとうございました  
これからも槻夜を宜しく願います。

そして銀魂をこれからも愛していきましょう！

きつと冷たい雨に打たれても、貴方となら大丈夫

貴方がくれる、約束の傘が、今も私を護るから

ねえ、また会えるのでしょうか？

私が、約束を護るから

貴方も約束の続き。今まで通りに、走り続けて

だから、君に想いの花束を

槻  
夜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1764f/>

---

せめて、君に甘い夢を/銀魂/土ミツ

2010年10月12日00時24分発行